

気違い部落のその後



きだみのる年譜（太田越知明『きだみのる自由になるメソッド』より）

- 1895 奄美大島で医師の父山田吉郎、母りの次男として誕生
- 1910 体をこわし、東京の叔父の元に
- 1911 家出して函館に。ジョゼフコットに会う
- 1912 東京湾で自殺を図って叔父から勘当
- 1917 慶應大学中退、コットのもとでアテネフランスの仕事を手伝う
- 1921 デュルケーム『社会学と哲学』を翻訳
- 1922 戸田濱と結婚
- 1929 山濤書院を破産させて家出
- 1930 林達雄との共同訳ファール『昆虫記』（岩波文庫）の刊行
- 1933 フランス政府奨学生としてパリ大学でマルセルモースに学ぶ。
- 1935 Lブリュール『未開社会の思惟』を翻訳
- 1939 パリ大学を中退してモロッコに。帰国してアテネフランス講師に
- 1943 『モロッコ紀行』を発表。恩方村医王寺に疎開
- 1945 フランス通信社記者になる
- 1946 「世界」に「気違い部落周游紀行」を発表
- 1948 『気違い部落周游紀行』を刊行。毎日出版文化賞受賞。
- 1955 八王子市議選出馬するが得票数23で落選
- 1957 松竹が「気違い部落」を映画化
- 1965 八王子市元八王子町の新制作座に移る
- 1968 飯田市ヘルスセンターに移る
- 1972 大船渡市に移る
- 1975 上京して入院、死去

デュルケーム(Wikipedia)

個人の意識が社会を動かしているのではなく、個人の意識を源としながら、それとはまったく独立した社会の意識が諸個人を束縛し続けているのだと主張し、個人の意識を扱う心理学的な視点から社会現象を分析することはできないとして、タルドの心理学的社会学の立場を批判した。

フランスにおいて初めて社会学の機関紙として、L'ANNÉE SOCIOLOGIQUE(社会学年報、1898年発刊)を創刊し、この機関紙の執筆者や協力者たちによってデュルケーム学派という研究グループが形成された。この学派は、彼の死後マルセル・モースが中心となり、フランスにおける有力な社会学派へと成長するに至っている。

リュシアン・レヴィ＝ブリュール(Wikipedia)

日本では1920年代からブリュールが紹介され、柳田國男は「日本の民俗学者必読の書であるばかりでなく、万般の教養人に読まるべき本だ」と推奨している。

マルセル・モース(Wikipedia)

1926～39年にかけてリュシアン・レヴィ＝ブリュールが創設したパリ大学民族学研究所で民族誌学を講じた。

代表著作の『贈与論』はポトラッチ、クラなどの交換体系の分析を通じて、宗教，法，道徳，経済の諸領域に還元できない「全体的社会的事実」の概念を打ち出し、クロード・レヴィ＝ストロースの構造人類学に大きな影響を与えた。

岡本太郎(Wikipedia)

1932年頃、パリ大学（ソルボンヌ大学）においてヴィクトール・バッシュ教授に美学を学んでいる。「何のために絵を描くのか」という疑問に対する答えを得るため、1938年頃からマルセル・モースの下で絵とは関係のない民族学を学んだといわれている。

気違い部落周遊紀行のエピソード

章	エピソード	きだのコメント
1～11	導入部	
12	狭く貧しいが、「村はええでっせ」と村人はいう	こんな隅っこを後生大事に先祖代々守ってきているのがわからない
13	愛想の良くない国で、シンさんは「議員を上げたり下げたりする」と落としのある話で我々を興がらせる	人は言葉で支払われることを厭わない
14	シンさん「村人は、村役場で村長の近くを歩いていると、村長と親しいと思って言うことを聞いてくれる」	アイソポス「一匹の口バが獅子の皮を着て歩き回ると、他の動物は怯えて逃げる」
15	シンさんの「26代も先祖を遡られる家は他にない」という先祖崇拝	一番古いということだけで値打ちがある
16	檀家総代のシンさんの「蓄音機なら、ちょぼいちもやらないし、お経を間違ふ心配もない」	これは写真と絵画の優劣論に一脈通じる
17	シンさんの「水を飲んでから体重計に乗っても、その分体重は増えない」という疑問	私が適当な返事をしなければ彼は言い負かしたという勝利感を味わう
18	サダニイの「驚いただよ。東京にゃノミがいねえ。ここではノミは湧いてくる」	部落の家を訪ねた時は立ち話で帰るに限る
19	村人が「ままこ」と呼んでいる木にはイボがある。イボは手のひらにお灸を据えられた継子を思い出させるので「ままこ」と言われている。	継子から継子虐めを想起する文化。文化的差異は広がってしまう
20	ひん剥いたお札を見た子供が「神様は木なんだ」	子供は子供なりに合理主義者
21	シンさんは、他人を呼び捨てにするが、妹はさん付で呼ぶ	部落では苗字に敬称をつけない
22	お寺の前で、村人が咳き（しわぶき）をする	話をしたいときは咳をする
23	シンさんは「言い負かしでは負けたことがない」	討論は、事実から論理的に追求するものにはならず、言い負かされるのは屈辱
24	サダニイの肥柄杓の出来栄えをみんなで批評する	部落のそれぞれの人物には個性があり、教育を受けたなら一角の人物になった可能性もある
25	三代前の和尚は、欲望に逆らわないことを是としていた	肉体が発育とともに自然に望むことをありのままに満たせば、精神も歪まない
26	「先生は蝸牛をおかずに、稗を食っている」	食べるものについての先入観念に縛られている。稗を団子にしていた食べてた過去がわかると、稗を食べることを受け入れた。
27	寺で講習会を計画すると、計画の進行とともにサダニイの熱が冷める	抜け駆けの功名を好む

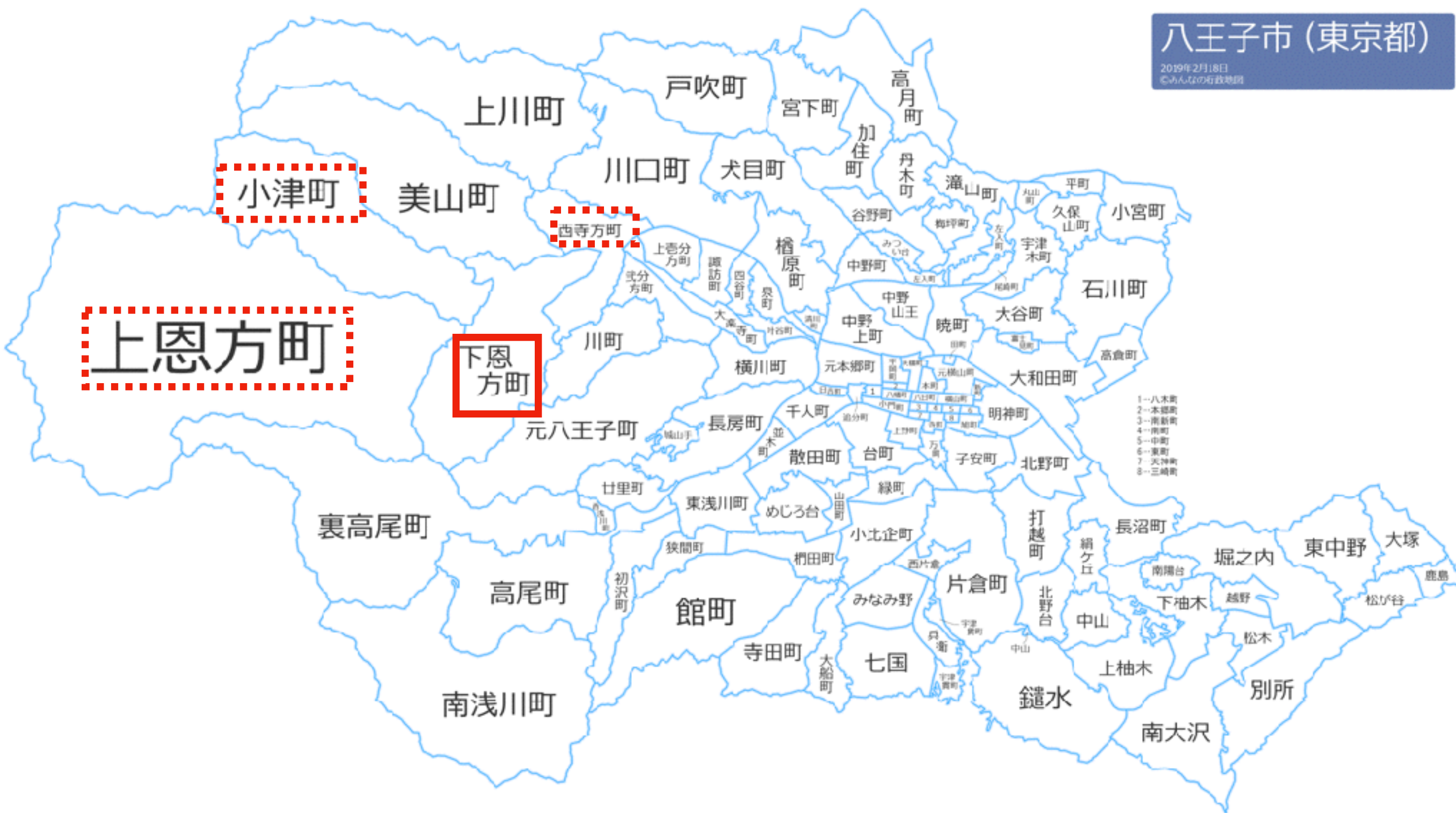
気違い部落周遊紀行のエピソード

章	エピソード	きだのコメント
28	部落では下肥のことをゲスという	元は下級役人を指していたが、言葉が悪い方の意味を強めていった
29	お墓が怖いという村人に「死人は怖くない、本当に怖いのは生きている人間」	過去は死者の恐怖、現代は生者の恐怖において生活している
30	部落の入門式は賭け事を一緒にやること	善友の友情は、しばしば悪友の友情に及ばない
31	単調な生活の結果、村人は会っても挨拶もしない	村人の生活は退屈に満ちている。その捌け口が賭け事
32	200匁の鰻を釣り上げた自慢話	部落の会話の多くは、社交界と同じく意味がない
33	おはなさんは、いつもおはぎを勧めてくるが、サダニイは手をつけようとしない。	部落の中では、自分のことは棚に上げて、他の住人についての悪口はたくさん出てくる。
34	寺の山の本を切って売ることになったが、入札するか内輪で揉め、切り方で揉め、なかなか仕事に取りかからない	共同作業では、仕事をやることが自分に返ってこない。自分に返ってくる仕事は熱心だが、そうでないものには熱が入らない。
35	戦争中の夏に布団を売るなというギダさん。冬になれば罹災者に高く売れるから。	Homo homini lupus est.他人に対して人はまさにオオカミである。
36	ヨシさんが、ひな祭りの日に娘にわざわざ饅頭を届けてくれた	繊細な心遣いが示された
37	濁酒造りを摘発するために、警官が子供に父親の行状を喋らせた	法律の厳格な適用は、しばしば非常な害悪をもたらす。
38	葬式では村を上げて助け合うが、食糧危機の時には貧窮者を助けようとしない	伝統にハマった出来事に対しては相互扶助をするが、それ以外の出来事では自己防御の本能が出てくる。
39	ヨシさんのところが1.6町、他の13軒が1.5町を耕している。供出の割当は面積ごとなので、ヨシさんは耕地の一部を耕さずに割当を減らそうと画策している。	1軒が正義を主張すると13軒は反発する。正義は、自分の利益を守るための道具にすぎない。
40	種まきを忘れた木崎長老、人参の埋めた場所を忘れたタムラ先生、その2人が部落の政治を決めている。周りも2人が決めたことに従う。しかし木崎長老が死に、タムラ先生が失語症になって老人政治は終わった。	長老たちの権威には法的権力を持たない。権力の源泉は、贈答、気前によって周囲の人を負かしたからか。部落の人が困ったときに相談に行き、援助を受けられるのはこの2軒だった。
41	神社への願掛けに同行する予定が、家族の不幸で同行しなかった。穢れに対する感情が、行動を支配している	穢れの伝染についての意識が行動を支配している様子を見ると、いつの時代に生きているのかと思う。
42	村の中で闇値でものを買うのは変だと言った婆さんに、誰も物を売らなくなったことがあった。	闇の独占価格で物を買うというのは、交換というよりも強奪に近い
43	反あたりの収量を自慢しているジンザさんは、「こんなはずではなかった」と秋の収穫時期にはいつも失望している。	思想、政治の世界では、現実には起こっていることに直面するわけではないので、自慢百姓がはびこっている

気違い部落周遊紀行のエピソード

章	エピソード	きだのコメント
44	「とうの虫」という幼虫を食う風習。東京からの学生はグロテスクという。	人間は食べ物について、政治思想よりも多くの偏見を持っている。
45	おさとさんは、ひじり（囲炉裏）で灰が立たないような薪ともやを使っていることを自慢する。杉山さんは、家の縁側を磨く事を誇示する。	些細なことを誇っているようだが、現実には根ざしている。世の中には自分の持たないこと、知らないことを誇っている人が多い。
46		
47		
48		
49		
50		
51		
52		
53		
54		
55		
56		
57		
58		
59		
60		
61		
62		
63		
64		
65		
66		
67	結び	

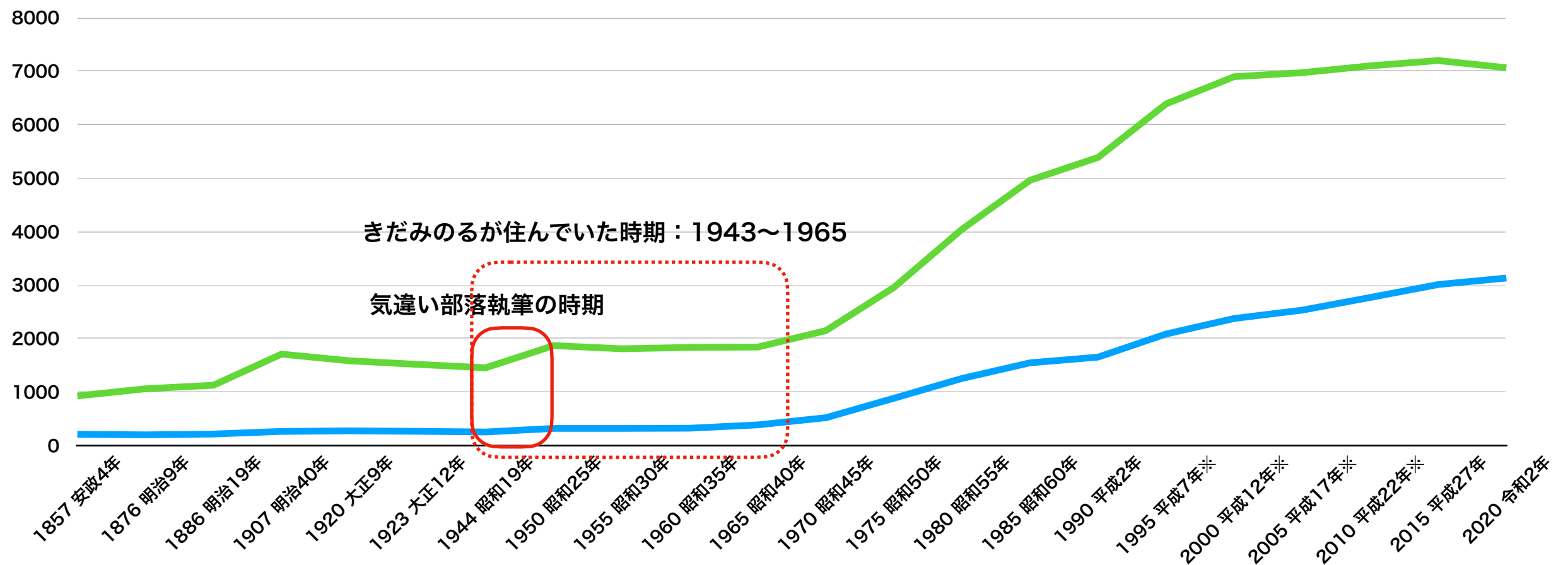
1955年までは南多摩郡恩方村（現在の^①上恩方町、^②下恩方町、^③小津町、^④西寺方町の部分）



下恩方町の人口世帯数推移

各年1月1日現在（1995～2010は前年12月末日）

恩方の歴史年表：恩方の歴史を知る会より



舞台の辺名部落が属する下恩方町

- ・ 気違い部落執筆の頃の人口は2000人弱
- ・ 1970年頃から人口増加して1995年頃からは約7000人
- ・ 人口は1995年頃から頭打ちだが、世帯数は増えている

江戸時代からの部落の
雰囲気が残っていた
最後の時代

辺名部落

- ・ 気違い部落執筆の頃は、14世帯（『気違い部落周遊紀行』12章）
- ・ 平成32年には74世帯（五十嵐一男『八王子市下恩方町にある辺名の歴史』）
- ・ 江戸時代1830年頃も14世帯（恩方の歴史年表）

八王子市『八王子市西部地域恩方の民俗』による下恩方地区の生活

	昭和戦前期まで	戦中から戦後の 食糧増産期	昭和20年代から 30年代以降
畑の生産	多くを桑園が占め、残された場所で 大麦、小麦、陸稻、豆、ソバ、ア ワ、キビなど穀類、野菜、芋などを	桑園をサツマイモ、麦、大豆 などの食料畑に変えた	桑園に河川水をポンプで揚げ水稻を栽培 キュウリ、スモモなどの栽培が始まる
換金作物	繭の生産		野菜をオートで淀橋市場に。 当時は高速道路もなく遠方から野菜が市場に 入ってこなかった。
水道燃料	井戸水利用 囲炉裏で枯れ木や薪を燃やす		水道、電気、プロパンガス
食事	朝に朝飯と昼飯の分を炊き、夕方に 湯食分を炊く。 主食は大麦に米を混ぜた麦飯 副食は野菜や芋の煮物、山菜、川 魚、ヤマドリ、ウサギなど	麦飯にサツマイモ、コーリヤ ンなどを混ぜる 家畜（ヤギ、イヌ）なども 食う	常食は麦飯から次第に白米飯へ 冷蔵庫の普及で生魚が届くように
村の生活の イメージ (鈴木)	基本は自給自足。次男坊以下は食っ ていけず村を出る。 交通の手段も限られていて、部落の 人たちの生活圏は部落の中。 一人ひとりの交流圏は部落の中。		交通の発達（自家用車、バス）によ り、職業の選択も広がる。 給与収入を得て、消費する生活に。 畑は不要に⇒相続税のために農地売却 一人ひとりの交流圏は広域化多重化、 しかし地元での交流の必要性は低下。

1941年

国土地理院空中写真閲覧サービスより



1961年

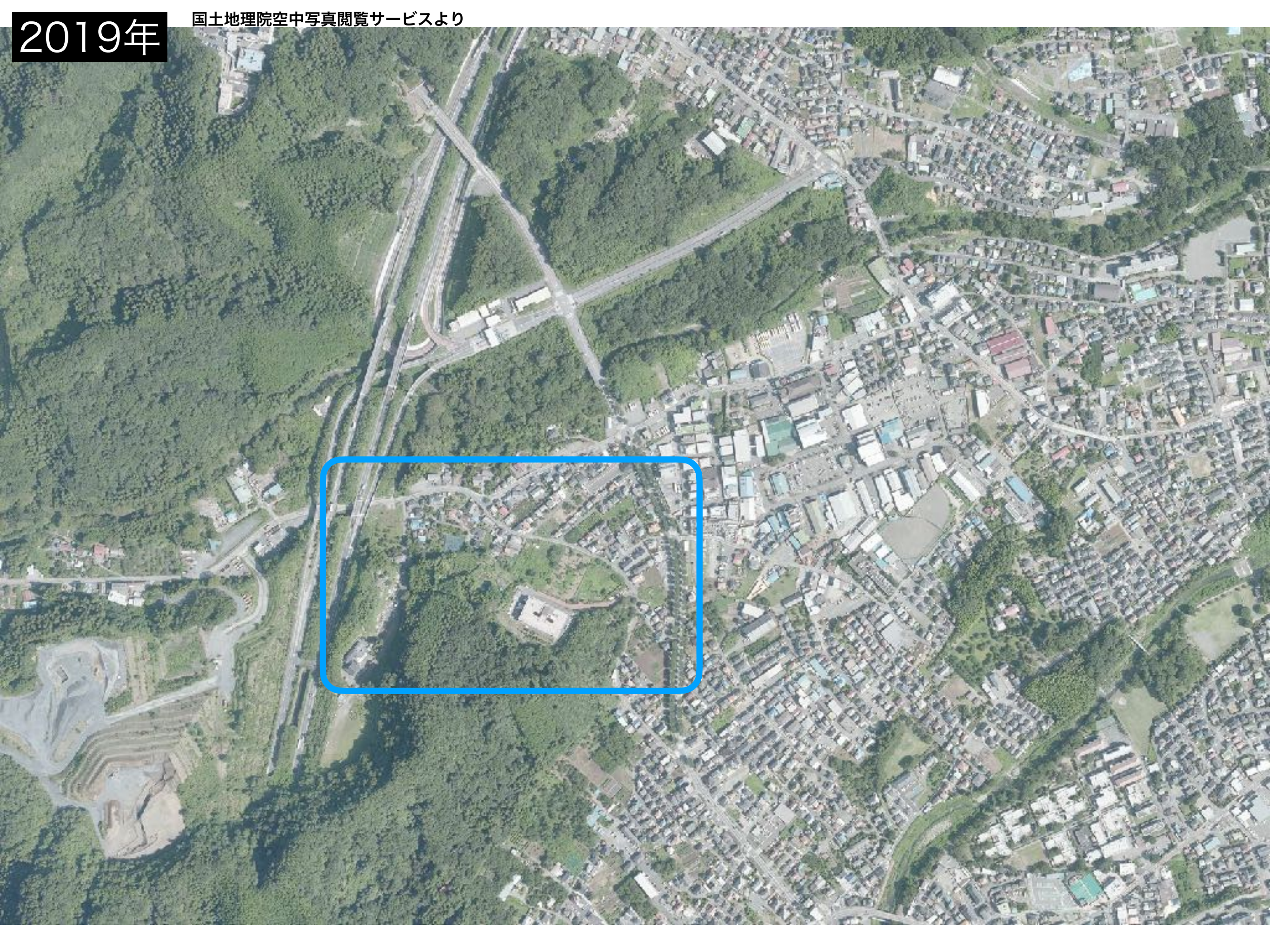
国土地理院空中写真閲覧サービスより



1989年

国土地理院空中写真閲覧サービスより





2019年

国土地理院空中写真閲覧サービスより

八王子市下恩方町の辺名部落



八王子都市計画図（八王子市決定）

09LC164

09LC161 二の沢	09LC162 美山町北	09LC171 上川町
09LC163 小津町	09LC164 美山町	09LC172 宝生寺
09LC261 上恩方	09LC262 下恩方	09LC271 川町

行政区域
東京都 八王子市

美山町

1:2,500 東京都地形図
24-19 (IX-LC16-4)

図面番号
八王子市 09LC164

09LC052	09LC061			09LC0091		
09LC054	09LC063	09LC064	09LC073	09LC074	09LC083	09LC0094
09LC152	09LC162		09LC171	09LC172	09LC181	09LC192
09LC154	09LC163	09LC164	09LC173	09LC174	09LC183	09LC194
09LC261	09LC262	09LC271	09LC272	09LC281	09LC282	09LC292
09LC273		09LC274	09LC283	09LC284	09LC293	
09LC361	09LC362	09LC371	09LC372	09LC381	09LC382	09LC391
09LC383	09LC384	09LC393	09LC394	09LC393	09LC394	09LC395
09LC461	09LC462	09LC471	09LC472	09LC481	09LC482	09LC491
09LC483		09LC484	09LC493	09LC494	09LC503	09LC502

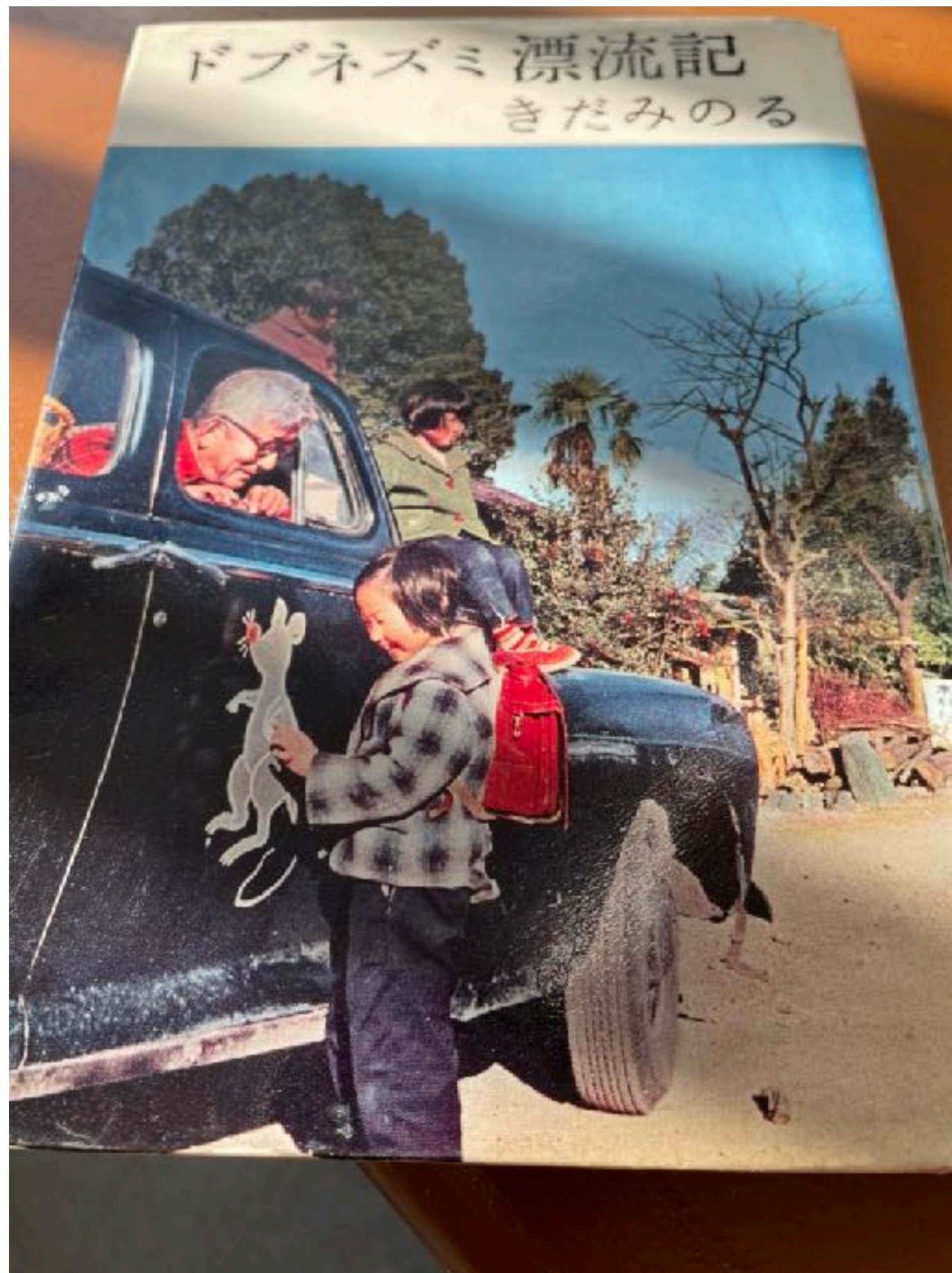
市街化区域の一番外側 最後に都市化したエリア

関東山地の入り口、関東平野の西の果て

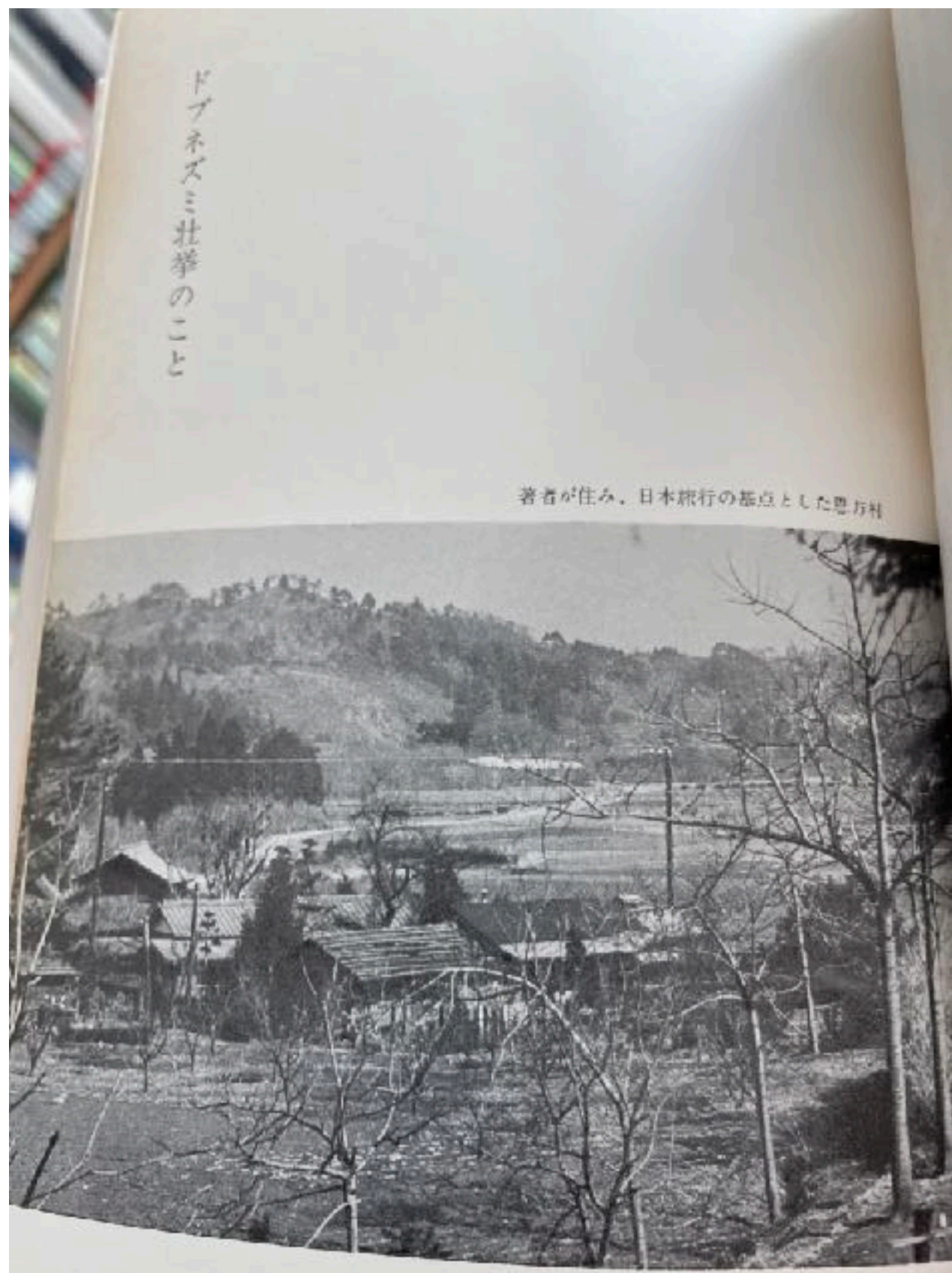
	市街化区域	市街化調整区域
趣旨	すでに市街地を形成している区域及びおおむね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域	市街化を抑制すべき区域
建物	積極的に市街化を図るべき地域とされているので、用途地域による土地利用や都市施設（道路、公園、下水道、学校、病院など）などの都市計画が定められる	・ 農林業にたずさわっている方の住宅 ・ 現在居住されている方の住宅の建て替え ・ 農家の次男・三男の方など分家住宅の要件を満たす住宅や、開発審査会が認めたものなどの建築物しか建てられない
農地	生産緑地として指定されなければ固定資産税は宅地並み課税	農地の転用には、その種類によって厳しい制限

車内のきだみのる

ドブネズミ漂流記(1961発行)
の表紙



ドブネズミ漂流記(1961発行)の章表紙



現在の似た角度



2023年1月20日訪問



八王子市下恩方町の辺名部落



部落の入り口にある桜塚



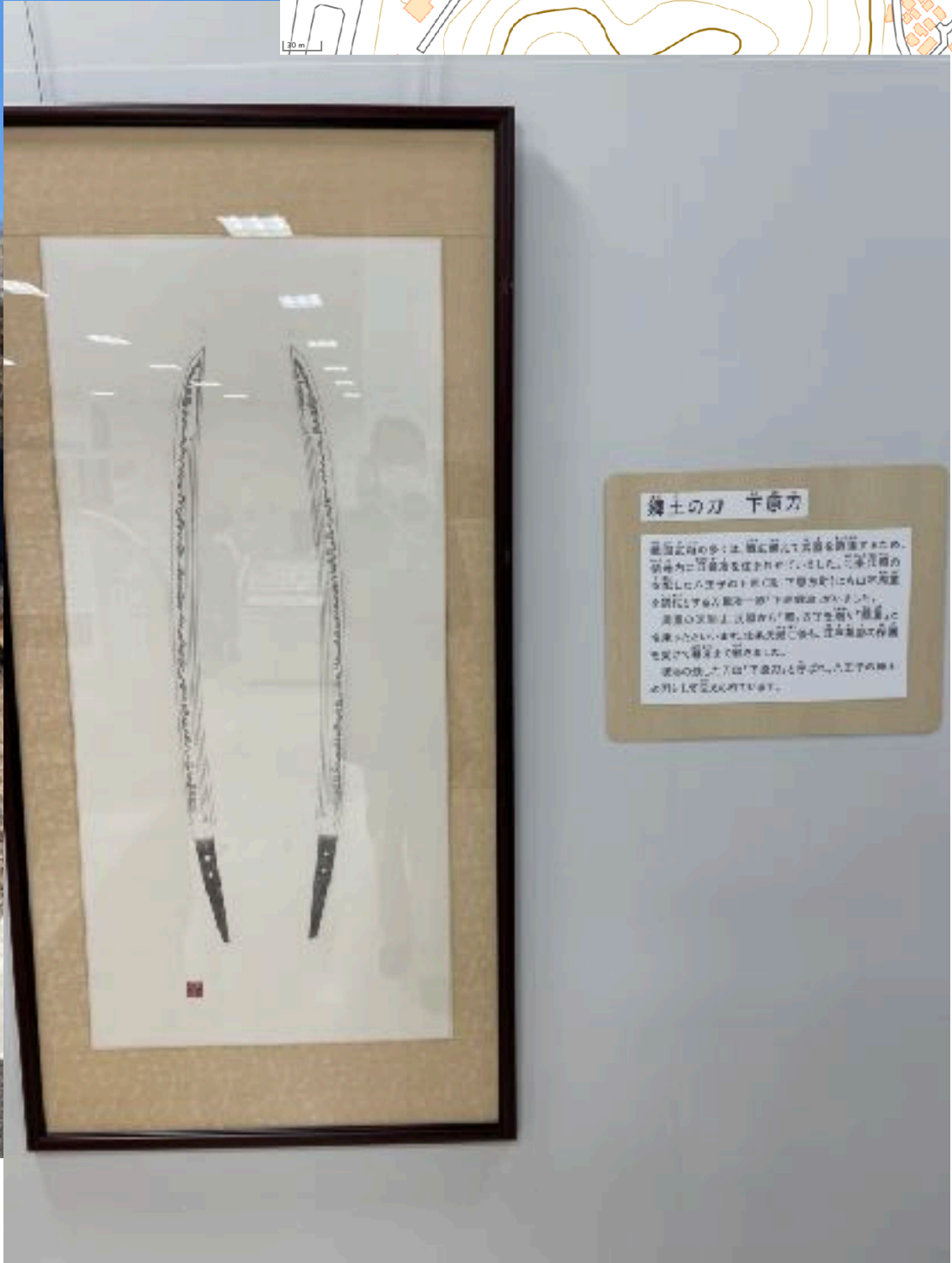
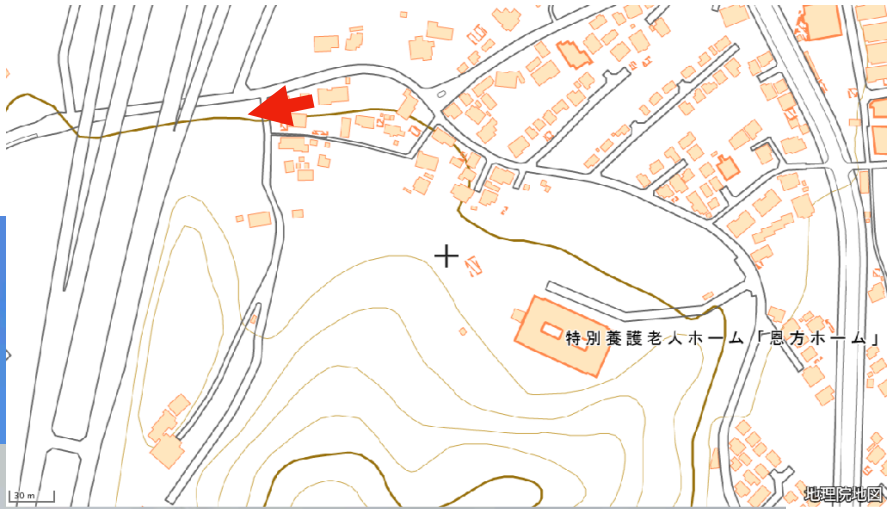
しばらくは
花の上なる
月夜かな 芭蕉



圏央道がすぐ脇を通っている



下原刀鍛冶発祥の地



きだみのるのいた医王寺



医王寺の裏は圏央道、平坦になった裏山は建設会社に賃貸



医王寺の入り口付近の木村さん



小学生の頃、きだに会った。

医王寺の今は庫裡が建っているあたり。

きだは客人があると木村宅の風呂に入れた。客人は外人が多かった。

墓石は、賭け事の縁起担ぎで削られてる。

柚子の木は、きだからのプレゼント



ひいおじいさんは、機織りで儲かっていた。祖父の代?で遊んで、畑も売ってしまった。

本人は相模原の学校に勤務して、今は家の畑。前は2000羽の養鶏をやっていた。

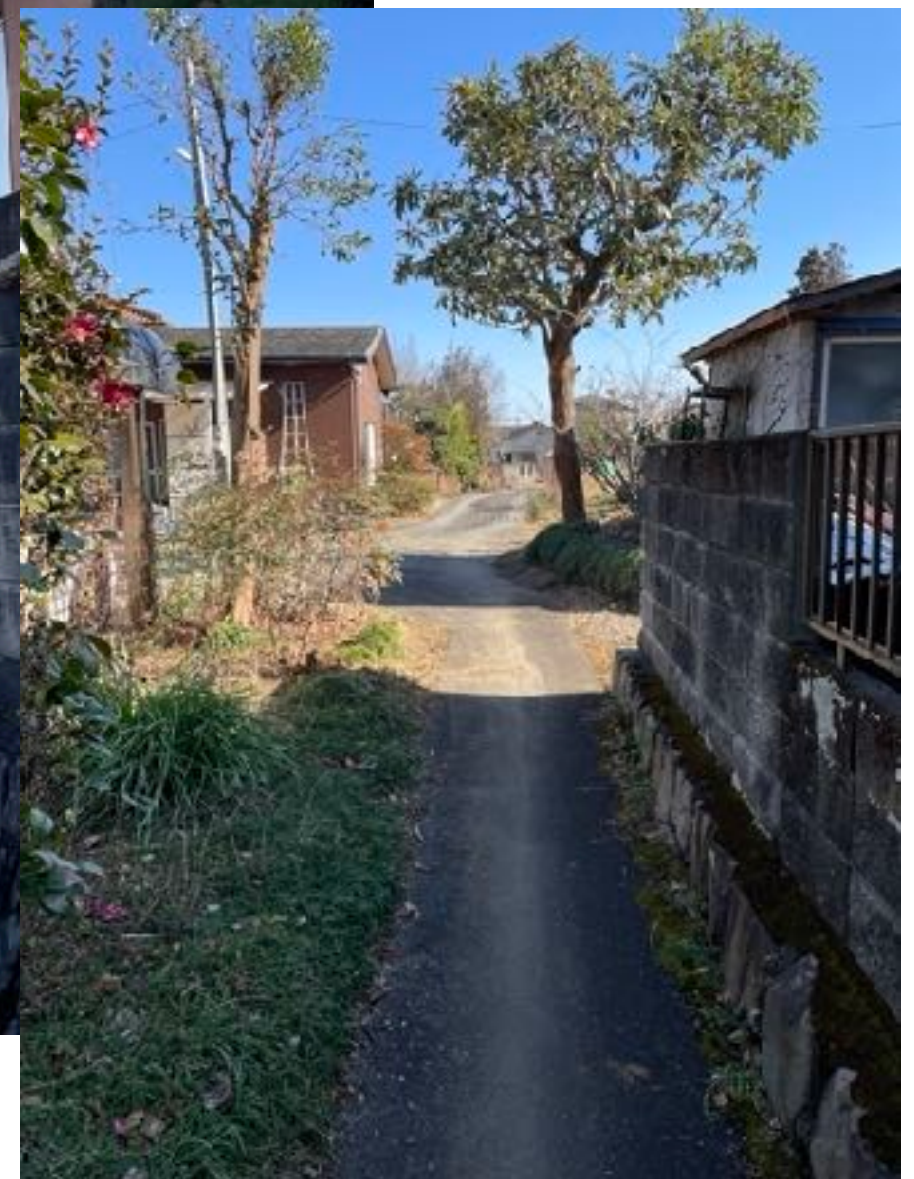
息子は自動車関連の仕事をしている。コンテナにはスタッドレスタイヤがしまっておりある。

医王寺裏の山は、地元の人々の砕石会社がダイナマイトで削った。
ダイナマイトの発破のおかげで墓石がずれているところがある。
砕石会社としては八王子で初めてだった。

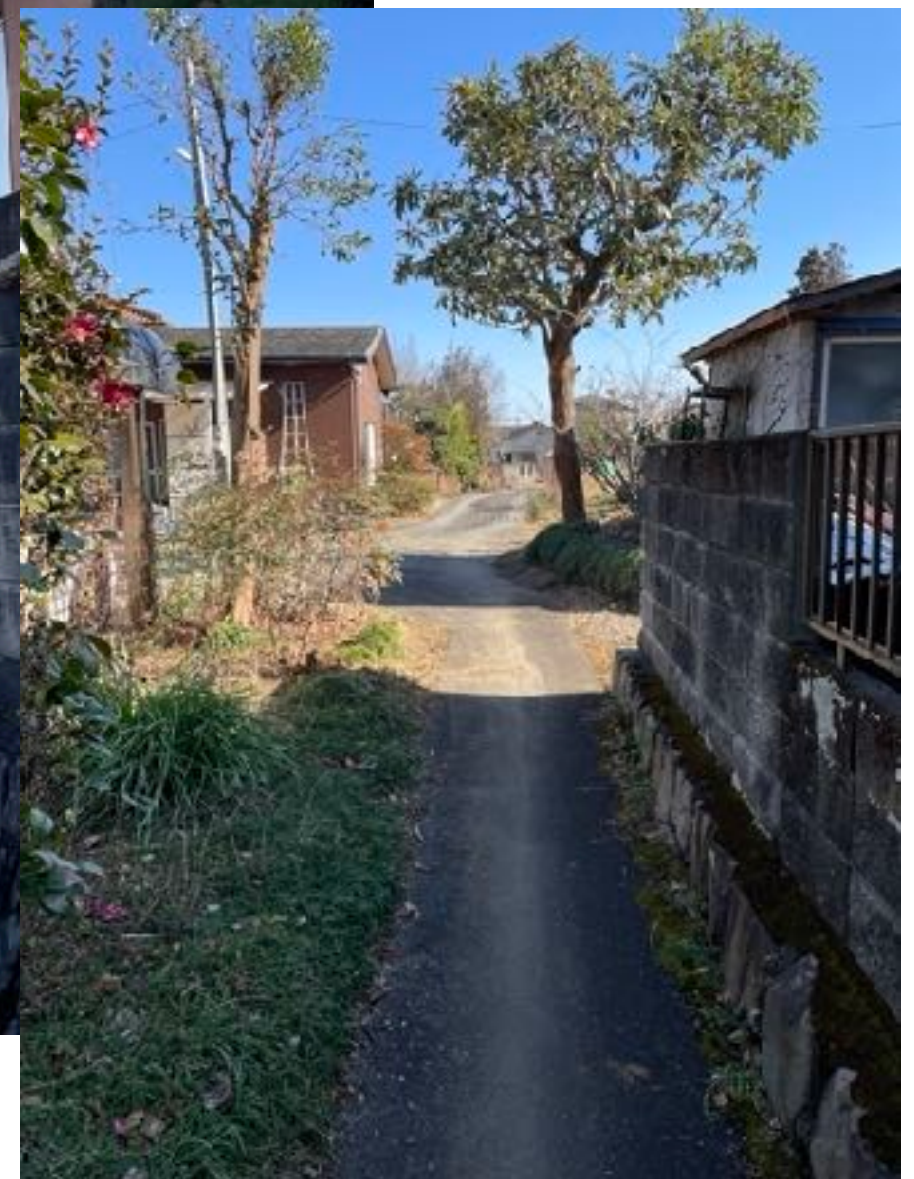
1989年の航空写真



木村さんの家の脇の古道



木村さんの家の脇の古道



辺名への古道



畑は建売住宅に。残った畑は生産緑地指定



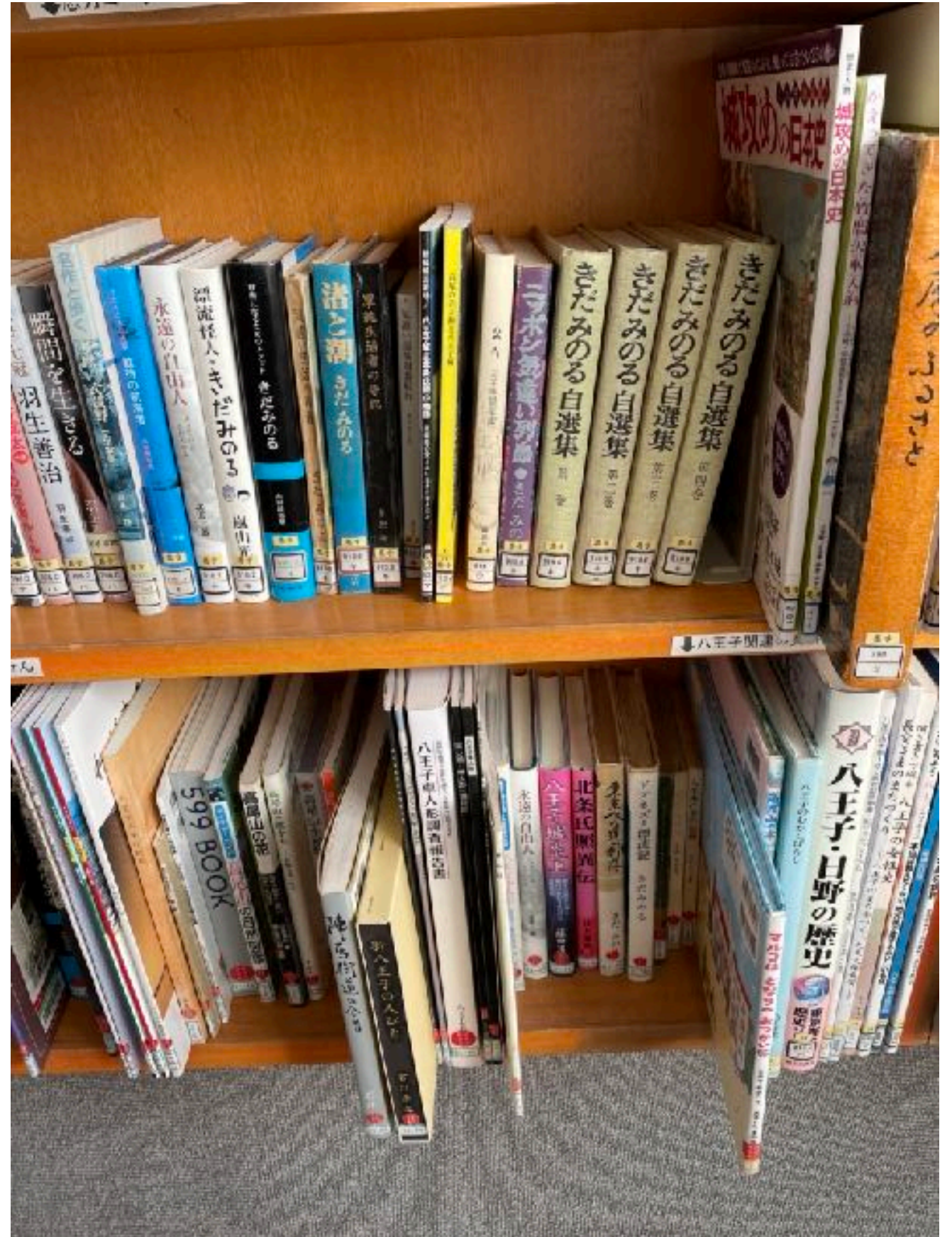
隣の部落（上宿）の畑と裏山の様子。昔の畑と山の様子かな？



隣の部落（上宿）の畑の反対側の路地の様子。今の多摩でよく見る風景？



恩方市民センターの図書館



きだみのるへの評価

恩方の歴史を知る会『恩方の歴史年表』

1957年9月 恩方地区住民らは、松竹に対し撮影中の映画「気違い部落」のタイトル変更などを要求。（交渉決裂）

郷土資料館研究紀要

八王子の歴史と文化第15号

神かほり

「恩方村の文化活動の聞き書き（1）」

2003

菱山忠三郎氏

きだみのるさんが「気違い部落」を書いたことについては、私は辺名の人じゃないからわからないけど。きだみのるさんは外の人だから、そういう面では自由に書いたんじゃないですか。出てくる登場人物は、村の者なら誰だか全部わかりますよね。けれども外部の人が書くのには、それほど抵抗がない、というのはありますね。

郷土資料館研究紀要

八王子の歴史と文化第16号

神かほり

「恩方村の文化活動の聞き書き（2）」

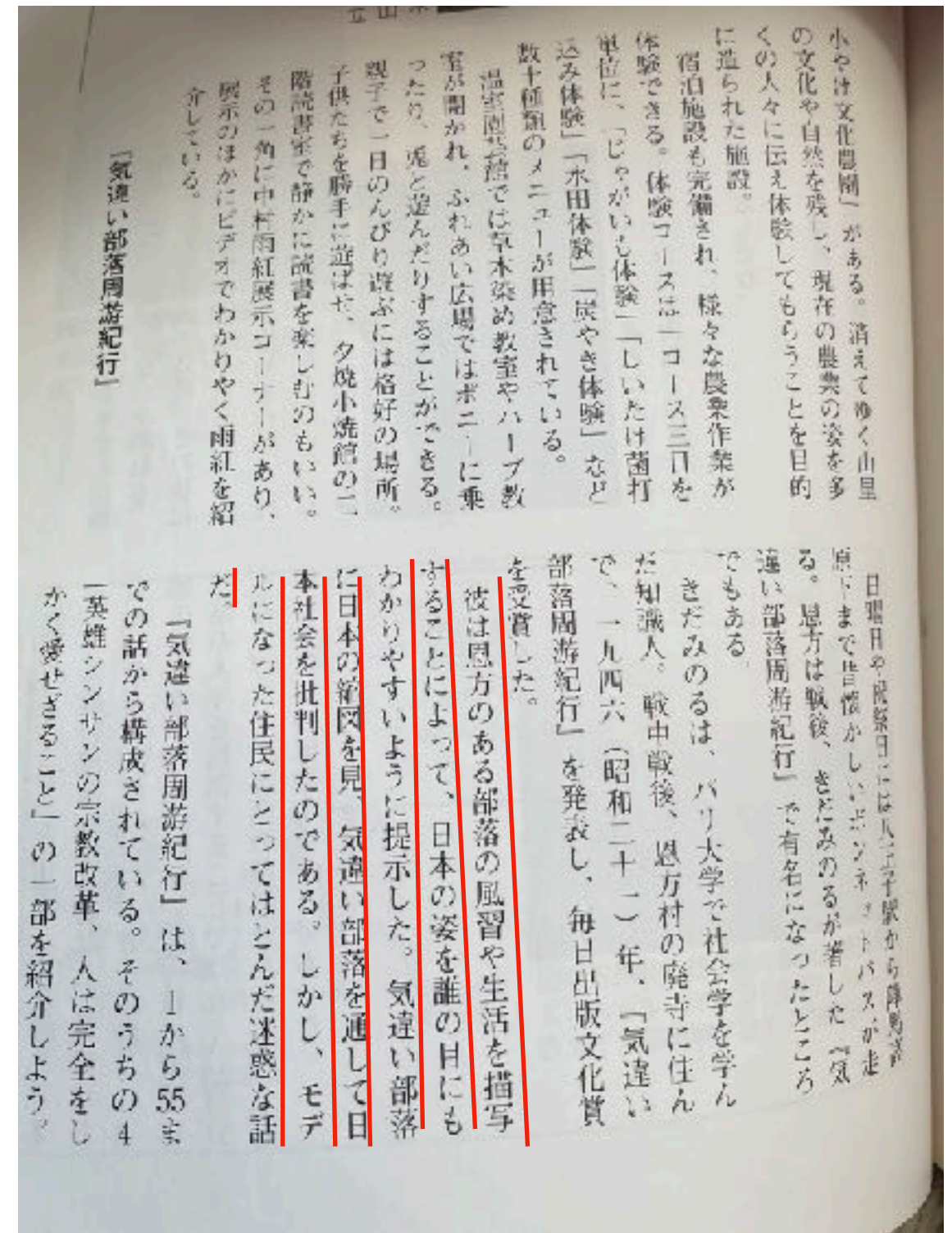
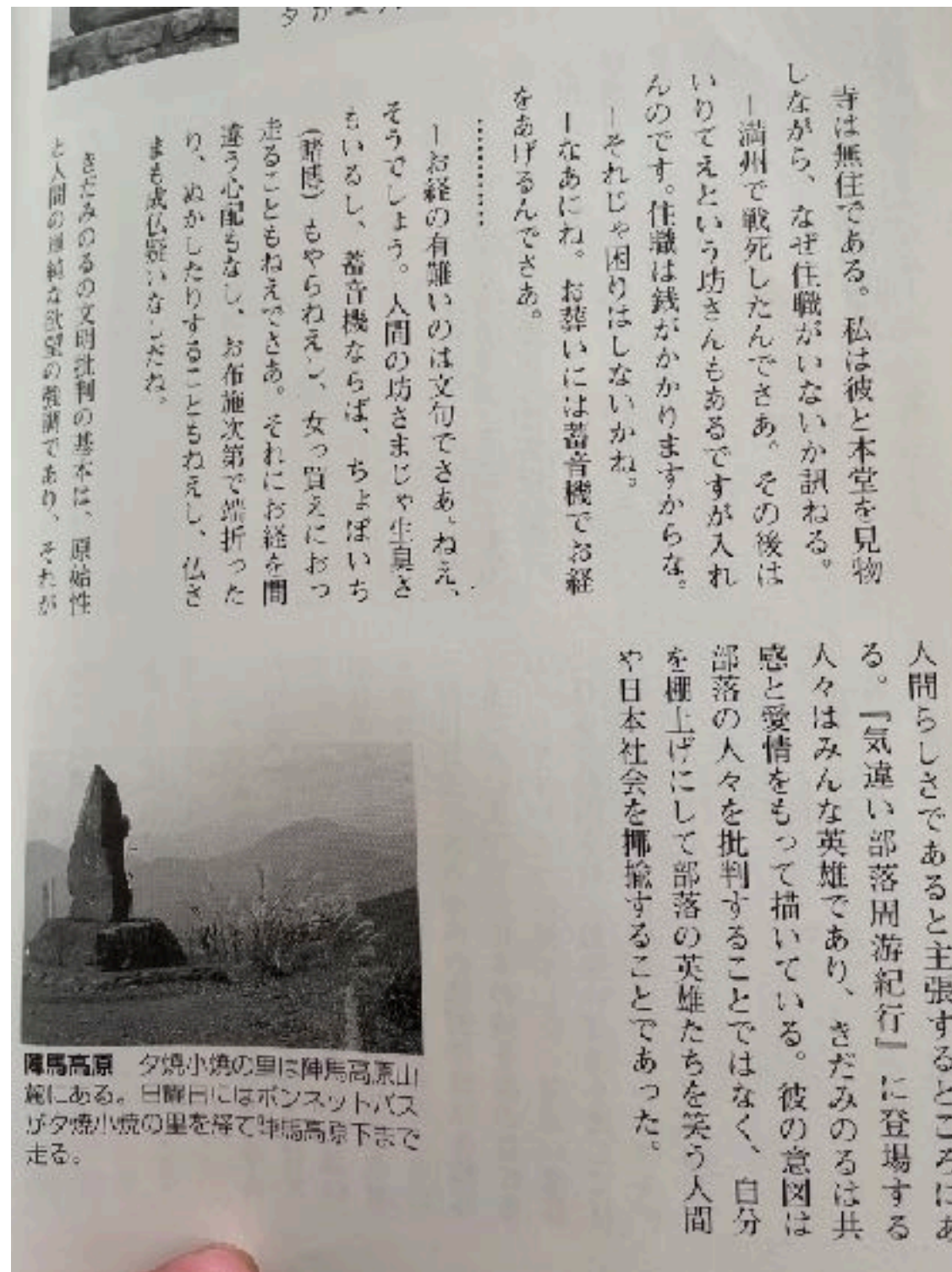
2004

馬場源五郎氏

きだみのるとの交流
私は、きだみのる（本名・山田吉彦）先生にも教育を受けた。友人と遊びに来いと言つてく
ださつて、私は百姓をしていたので、先生と一緒に食べようとサツマ芋を持って行つた。先生は、フランスの料理だといって、牛や豚の骨をスープにし、モツのようなものをゆがいて食べさせてくれた。当時の私たちには、ヨーロッパの国の料理は、初めての味わいだった。きだ先生は、戦時中、新しい思想を広め、フランス語もペラペラだった。私は、廣澤先生ときだ先生が、恩方をずいぶん変えたと思う。
第一次吉田内閣の農林大臣和田博雄氏が、きだ先生のところへ来たことがあつた。私は、和田博雄氏を迎えに、自転車五台で東八王子駅（現・京王八王子）まで行つたことがある。和田氏の分として、一台余分に自転車を持っていた。八王子で播磨社へ寄り、途中、八王子の町並み、元八王子・恩方の農村をよく見てもらい、説明をした。その後、医王寺へ来て討論をした。

きだみのるへの評価

青木登『名作でめぐる多摩武蔵野』1999



きだみのるへの評価

八王子市郷土資料館 『夕焼けの里の文化』 2001

きだみのる (1895-1975)

本名山田吉彦。作家。アテネ・フランセ創立者であるジョセフ・コットに師事し、パリ大学留学中はマルセル・モースに社会学・民族学を学ぶ。のちアテネ・フランセの教師となる。この間、ファール『昆虫記』、レヴィ・ブリエル『未開社会の思惟』などの翻訳を行ったことでも知られる。

昭和18年(1943)に恩方村辺名の医王寺に疎開、戦後もそこに転居する。21年、匿名での生活をモデルにした『気違い部落周遊紀行』を雑誌『世界』に発表。23年に吾妻書房がこれを単行本化し、毎日出版文化賞を受賞した。

『気違い部落周遊紀行』は、当地で「部落」と呼ばれる地縁集団(現在の小字に相当する)での生活の中から見聞したことを、社会学研究の視点から独特の語り口で分析した作品であり、大きな反響を呼んだ。きだは、戦前の長い右派生活で培われた国際人的教養と感覚をもって、外からの眼で日本社会の構造を分析する一つのモデルとして、この小さな社会集団を諷刺的に描いたのである。それは「気違い部落」という今日では差別用語ととられかねない強烈な言葉をなぜ用いたのかという、きだの意図にもかかわってくる。きだの長男山田繁は文庫版『気違い部落周遊紀行』あとがきの中で、「この本を読んで登場人物の英雄たちに軽侮の念をいだいたり、優越感を味わう人々の方が、どこかおかしいのであって、英雄たちと呼ばれて特殊化されているこの集落の巨人たちの考え方・行動のパターンは、実のところ私たち日本人の誰も心の中に生きている一般的なものである」と述べているが、きだの付け加えたタイトルの意味は、真に逆説的な意味において「一般的な」日本社会を浮き彫りにさせる装置であった。そしてそれ以降も「気違い部落」をモチーフに『気違い部落紳士録』『日本文化の現地に潜むもの』『気違い部落から日本を見れば』『にっぽん部落』など数々の作品を生み出していった。

きだはその後昭和30年に八王子市議会議員選挙に出馬し、得票数23票で落選している。昭和40年に八王子市元八王子町の新制作座に移り、のち各地を放浪し、50年に死去した。



きだみのる (医王寺の前で) 昭和27年/原沢氏蔵

きだ
みのる

昭和六十年三月 ぎだみのる

八王子市議会議員候補者

きだみのるへの評価



TITLE:
日本社会の根底に潜むもの：きだみのるの記述を手掛かりに

AUTHOR(S):
薬師院, 仁志

CITATION:
薬師院, 仁志. 日本社会の根底に潜むもの：きだみのるの記述を手掛かりに. 京都大学教育学部紀要 1993, 39: 230-254

ISSUE DATE:
1993-03-31
URL:
<http://hdl.handle.net/2433/266335>
RIGHT:



結び

部落的な仕組において用いられる，人々を管理・制御する諸技術は，それぞれ出生地も歴史も異なるものであろう。それらが，ある一定の歴史的・社会的な条件のもとで再編成され，内閉的な小集団に染み込んでいったのである。したがって，きだの暮らした部落は，歴史的に遅れた状況にあるのではない。それは，日本的な近代に属するのである。もちろん，日本社会には，文字通り西洋近代的な層もあろうし，現在ではポストモダンに属する層もあろう。きだは，次のように述べている。

日本社会はこうして異質的な二つの社会から成っているように見える。一つは部落制のある社会とそれのない社会と。⁽¹⁷³⁾

だが，この二重性は，いかなる地理的分割とも厳密に一致しない。部落という管理機構は，ある抽象的な仕組の図解として捉えることができるのである。したがって，ある組織なり集団なりが部落制か否か，あるいは，ある人物が部落人か否かといった分類は，厳密さを欠かざるを得ない。ひとつの社会は，さまざまな要素が複雑に入り組んだ複合体であるに違いないのである。しかし，小集団の規模や丸抱えの程度，人目の強さなどはさまざまであろうが，部落的な仕組は，日本の〈近代的〉組織のいたるところに寄生していないであろうか。部落的な仕組が機能するのは，表面上は個人を単位とする社会の内部においてである。したがって，その仕組は，常に社会の根底に潜むものとならざるを得ない。だが，根底の部分には，確かに潜んでいるような気がするのである。きだは，次のように述べている。

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	きだ・みのるの実践的社会学：「気違い部落」のコスモポリタンとその認識の概要
Sub Title	Practical sociology of Kida Minoru : cosmopolitan in "insane braque (minimum local community)" and outline of his recognition
Author	平林, 豊樹(Hirabayashi, Toyoki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.50 (1999.) , p.1- 10
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000050-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.